
王女は下界へ

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王女は下界へ

【Nコード】

N8554Z

【作者名】

西崎想

【あらすじ】

王女であるメイリーンは、今日も、勉強の毎日。
マジックも得意ではないが……、
メイリーンは下界にいるいい男を見つけて……

メイリーンは王女様

「メイリーン様、こちらへ」
「ん？」

メイリーンは王女様。今日も、家庭教師が来た。

「またあ？もおう、いいわよ」

「そんなこと言わずに……メイリーン様」

そう言っ、バイダーはメイリーンを呼んだ。

「バイダー？いいこと？私の命はいつでも守りなさい？」

「はい、王女様の命ずるままに」

「うんうん、そうかそうか」

そう言っ、メイリーンは、満足げ。

メイリーンは、今年で18歳。人間でいえば……だ。
じつは、王女様は333歳だ。

メイリーンは、まだ、あまりマジックが得意ではない。

メイリーンは、今日も、バイダーで遊ぶ。

でも、今日の遊びは……。

「あー、あの男、良い男」
なるほど、確かにいい男だ。

私は、女王。

メイリーンを監視しているのだ。
ん？

私は、暇つぶし……と、だ、黙れ！この、痴れもの！

まあ、いい、今日のメイリーンは、何かしでかしそうだな。
それを、見ようではないか。

「あーん、あんない男、私の物にしたあーい」

「メイリーン様！」

「なあにい？バイダー」

「算数のテスト！点が今……、これでは、家庭教師の私が……
くどくど」

「あーもう、早く、算数の時間。終わんないかしら？」

そう思うメイリーン。

そして、

チャララーン……リンリン。

「終わったあー！」

メイリーンは、急に元気になった。

「あ……あの……メイリーン……さまあー」

バイダーは、肩をがっくり落とした。

「ば・い・だー？」

「はは、はい？」

ん？と、色目使いで、バイダーを見る、メイリーン。

「こっちへきてえーん」

「あの……メイリーンさま、私はそんな事では墮ちませんよ？」

「そおつ？」

むっとするメイリーン。

「あっち、いこおっ？」

「あっち？」

メイリーンの指刺した方向は……。
雲の切れ目。

下界へ遊びに行こう

「ここ。見て」

そう言うメイリーンの言葉に、バイダーは雲の切れ目を覗き込んだ。

そこには、メイリーンが標準を合わせた、さっきのいい男が映っていた。

「彼が……どうしました？」

「あのね……ぼそぼそ」

少しして、

「えー？」

「なによ、そんなに驚かなくてもいいでしょ？」

「わ、私が何故、そのような……」

「いいから」

そう言うと、メイリーンは、傘を広げた。

雲の切れ目から、下界へ降りようというのだ。

メイリーンは、魔法を使える。

それは、

「その者を、強い力の持ち主にする」事だ。

あとは、……そう、今のうちに、空を自由に飛べる事が出来る。まあ、私もできる。

この、世界の人は……そう、バイダーだって出来る。そういう、「天使界」というところだ。ここは。

まだ、メイリーンは、魔法の勉強中。

しかし、魔法を、使いたくって仕方がない。

「バイダー、行きましょ？」

「……王女。私は……」

そう言いかけた、バイダーの口にメイリーンは指をあてた。

「しっ、早く！」

ストン、と、メイリーンが天使界から降りた。

「メイリーン様！」

「おい、もう俺は降りたからな！」

そう言っ、て、青年は、缶を蹴とばした。

「待てよ！由！」

「知るかよ！ばはーい」

由は、そう捨て台詞を吐いて、自分のカバンを持った。

由に力を

由は、少しひねた性格の中学二年生だ。
今日は部活の先輩とやりあってしまった。

「ふん、なんでい、あんな部活、辞めてやる！」
そう、独り言をいう、由。

それを、下界に降りたメイリーンと、バイダーが見ていた。
「むふふ、可愛い……あの子、好み」
バイダーは面白くない。

「ふん、なんだ、あんなやつ……」
そう、独り言をぶつぶつと……。

「バイダー、さっきの、シナリオ、よろしくっ！」
そう言つと、メイリーンは由の元へ、
「お、王女！」

機嫌の悪い由。
そこへ、

「い、いたた……」
「……ん？」

メイリーンが、由の前で、転んだ。

「おい、なんだ、どうした」
「あ、あの……私、悪い奴に追われてるの……」

「はあ？」

と、そこに……、

黒マントをまとった、バイダーが出てきて……、

「はっはっは、これでお前もおしまいだ、メイリーン」

「うう……こいつ、悪い奴で……」

「おいおい……なんだあ？お前ら、学芸会か？」

「貴方、名前は？」

そう、メイリーンが聞く。

「俺？俺はあ……まあいい、由だ」

「由！貴方に力があれば、私を助けられる」

「はっはっは、覚悟しろメイリーン」

「私が、貴方に力をあげる！」

「んつとに、よー、いらねえよー、帰るぜ？」

その時、由にメイリーンが、ただ一つ使える魔法。「力を与える」魔法を使った。

パァー……

「！？なんだ？」

「貴方に勇気を、与えます！」

そして、

「マジカル！」

カッ……

お助けマン

メイリーンは手に持った、ステッキをゆいに向けた。

「貴方に力を！」

そう言っていると、由の体が光った。

「な……」

由は言葉を無くす。

光が消えると、由がふりふりのスカートをはいている事が解った。

「なんだあ？」

「しまった、ごめんごめん」

そう言ってもう一回ステッキを振った。

赤いスーツ姿になった由は、びっくり。

「おい、お前、何やった！」

「貴方は、私を助けるの！」

由は目を吊り上げて、

「お前なあ、マンガじゃないんだからなあ！」

「私は王女様なの、この、バイダーに殺されようとしているの！だから、助けて！」

そう言ったメイリーンは幸せそう。

その様子にイラッときた由。

「お前らで、勝手にやつとけ。俺は関係ない」
去ろうとしたが、

「おい、この服、何とかしろ！」

「私はその服を何とかできるわ……取引しましょう」

「……どんな？」

「私の事を守れば、私はその服を魔法で解いてあげましょう」

「えー？」

由は嫌な顔を露骨にした。

しかし、それしかないのは、由にもよく解っていた。

「しかたない……で？どうすんだ？」

「この、バイダーを追っ払って！」

「えー？」

由はげんなりした様子。

「はっはっは、メイリン、覚悟しろ！」

演技にも熱が入ってきた、バイダー。

「こいつ！サッサと消えろ！」

由は、バイダーに蹴りをかました。

「いたっ！何をする！」

「ほら、しっしっ」

由がバイダーに去れというような態度をとった。

バイダーは、

「もういいか……、」

そう思い。その場から逃げだした。

「やったわ！由、助けてくれてありがとう」

「……おい、俺の服！」

「あ、ええ、解いてあげる」

ステッキを回すと、

パァー、

と、服は元通り。

由は一目散に逃げて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8554z/>

王女は下界へ

2012年1月5日05時46分発行